

豊かな心

浅野 正義

「心が豊かな人と心が貧しい人」僕の家ではよく話題にあがる言葉だ。

僕の家にはダウン症の伯父がいるので、家族総動員で伯父の介護をしている。日々、面白いことが我が家では起きる。例えば、母が買い物に行き刺身を買ってくる。その刺身を冷蔵庫に片付けようとするとき……刺身がない！母が数分、他の作業をしていた間に、伯父がその刺身をどこかに持って行ってしまふのだ。どこに持って行ったかは伯父に聞いても理解が出来ないので、家族で捜索が始まる。しかし、発見出来ないことも度々だ。数日経って、その刺身が押し入れから発見されることもある。

こういう事件が起きた時に、僕は自分の家族の底抜けの明るさを感じることもある。祖母は「お手伝いをして刺身を片付けてくれたんだ」と前向きな発言。母は「こんな毎日を送ってれば絶対にボケないわ」と強気な発言。みんなでゲラゲラ笑い合っている。どんな出来事もポジティブにとらえられる逞しさを、僕はこの家で生まれた時から毛穴から吸い込んで育ってきた自負がある。

僕は、障がい者を抱える家族と触れ合う機会も多かった。伯父が通う通所施設の行事にも、小さい頃はよく連れられて行ったものだ。そこで目にしてきた光景は、普通の学校ではなかなか見られないようなハプニングだらけの光景だった。ただ、僕の家族でも同じようなハプニングは日常茶飯事だったので、あまり違和感もなかった。それでも一つ、幼いなりに感じたことがあった。それは、障がい者を抱えた家族には様々な人がいるということだった。僕の家族は、障がい者が家族にいることを恥じるような素振りは全くない。しかし、障がい者が家族にいることを隠したがるような人や、人との関わりを避けたがっているような暗い感じの人もいた。正直、僕にはその感情が理解できなかった。自分の家族なのに、なぜ受け入れてあげられないんだろう。自分の家族ならもっと優しくしてあげればいいのに。いろいろな感情がこみあげてきた。

その気持ちを自分の家族に打ち明けたことがあった。きっと祖母や母も、僕の気持ちに共感してくれるはずだという確信があった。だが、祖母や母からは意外な言葉が返ってきた。

「その気持ち、私達も分かるわ。障がい者を家族に持つって大変なもの。」

いつもあんなにどんな事件も笑い飛ばしていた僕の家族も、きっとこれまでの生活の中で辛かったことや悔しかったことがたくさんあったのだろうか、と思えた瞬間だった。そのうえで、母はこうも言った。障がい者を家族に持たなければいけないという宿命を変えることが出来ないのなら、それを真正面から受け止めて、その生活を楽しんだ方が得ではないか。目に見えない宿命を恨んでも解決するわけではない。そんな後ろ向きな人生は、もったいないのではないかと。

僕の家族は宿命と戦っている。しかし、そこには悲壮感はない。むしろ、それを家族の強みに変えて、どんな宿命にも負けない姿をみんなに見せているようにすら思う。

そのおかげで僕も少しは、障がいのある人や、障がい者を家族に持つ人の気持ちに寄り添い

たいと思える自分になれたと思う。その心は、僕の家族に教わったものだ。

障がい者に対する偏見もまだまだあるのも事実だ。伯父と一緒に買い物に行くと、わざわざ後ろを振り向いて伯父のことをジロジロ見る人や、指を指す人がいる。そういうことに出くわした時に、家族で言われる言葉が、

「心が貧しい人だね。気の毒だわ。」

というものだ。僕はそういう経験をする度に自分は絶対ああいうことはしない人間になろうと思えた。

障がい者の家族は、確かに辛いことや悔しいこともたくさんあると思う。でも、その辛さや悔しさを反面教師にして、自分はそうならない！と決めることが出来れば、それはすごい教訓を得ることになる。また、本来はとても大変な環境で生きているのにそう見せないで明るく生活している姿を人に示していくことで、同じような境遇に生きている人達に勇気を与えることも出来ると思う。そう考えると、宿命は心は豊かにしてくれるものにもなり得るのではないだろうか。

それでも、やはり障がい者家族の苦労は、きれい事ではないはずだ。だからこそ、心を豊かにするのも貧しくするのも、心の持ち方一つだと感じる。宿命に勝つのか、負けるのか。これを決めるのは間違いなく自分だ。苦しい環境も幸せの環境に変えていけるという証明をしていけるのも、僕のような障がい者家族の大きな特徴だと思う。ならば、僕は自分の人生をかけて、心を豊かにする努力をしてみせる。自分の人生は、自分の心一つで好きなように切り拓けると僕の家族が教えてくれたから。